

[月刊]

# キャッチ ピース

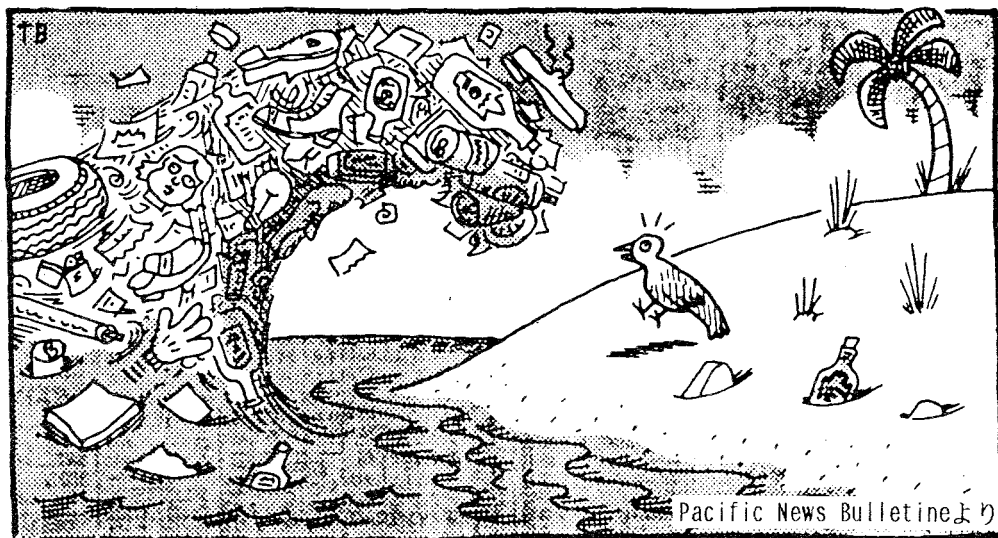
# 11

通巻90号  
1993.6

定価●100円

自衛隊の海外派兵を食い止め、大幅軍縮を！  
米軍基地を撤去しよう！  
反核運動を継続し、核廃絶を！  
憲法9条を世界に！  
市民による平和政策を提起しよう！  
草の根の国際共同作業をすすめよう！

月刊トマ喰い虫改題



Tom Bloom

## 平和基本法を語ろう！

呉ー横須賀●基地監視で「キャッチー」高性能弾薬の輸送

陸上自衛隊に削減の動き●市民による軍民転換を！

資料●なぜ、米軍はアジア太平洋前進配備をつづけるのか？

★維持会員（月間）

個人 1口 1000円

団体 1口 2000円

<会費は本紙購読料をふくみます>

★参加会員（月間）

個人 1口 500円

団体 1口 1000円

★通信会員

年間

3000円

脱軍備ネットワーク

# キャッチピース

## あなたも会員・読者に！

連絡事務所●〒223 横浜市港北区箕輪町3-3-1

TEL 045(563)5101

FAX 045(563)9907

郵便振替●東京6-136148 口座名「キャッチピース」

# 「平和基本法」を論じよう!

遠藤洋一  
福生市議

●雑誌「世界」三月号に、和田春樹さん前田哲男さん山口二郎さんら九人の名前で「共同提言」された『「平和基本法」をつくらう。平和憲法の精神に沿って自衛隊問題を解決するために』を、各地のグループや読者間で議論することを提案したい。

●すでに、議論が始まっている所もある。たとえば「非核市民宣言運動ヨコスカ」のデモ便り六一号でも紹介されている。一方、この「平和基本法」は、解釈改憲派の策謀であり、権力に媚びた見るのも汚らしいもの、と言いつつ出ず人もいるらしいと聞いている。

●しかし、私たちキャッチピースの今までの主張である、自衛隊の削減についてその法制化も含めての具体的提案は、とても大切なテキストであるはずだ。二年前に京都の反戦ドタバタ会議の青木雅彦君が自衛隊削減の市民提案「ハーフ・オプション論」を提案した時、私たちは、冷静な論議を作り出せなかった。市民の軍縮プランの一つを生かし切れなかった。しかし、今はこの「平和基本法」の提言を受け止め自分たちの財産にできるはずだ。

●七月四日、衆議院議員選挙が公示される。

今回の選挙は「政治改革」のみが争点になっているようだ。憲法議論も海外派兵も国際貢献も、戦後補償も何もかもが、「政治改革」と「新党ブーム」に飲み込まれた。そしてマスコミは、それが当然であると主張し、政党も「政治改革論議」のみを行っている。ましてや、自衛隊の軍縮も米軍基地の縮小も全く「政治課題」からは、はずれ切っている。

「政党の政治」とはそういうものらしい。●では、市民はどうすべきなのか。どこかにあるかもしれない、市民の「言い分」に耳を傾けてくれる親切的な政党にお手伝いに行くのか。うろろろと市民の願いを携えて、だれもいない国会の中をさまようのか。ちがうはずだ。革新政党の傘下ではない、自立した市民の平和運動はそうしてはこなかったはずだ。●自立した平和運動は、いかなる政治の流れの中でも、自らの運動を考え、工夫して作り、提案して行く。それが、私たちキャッチピースの紙上でも主張されている、東西冷戦崩壊後の平和運動のあり方というべきものだ。

●この原稿を書き終わった七月一日の深夜、午前二時ごろ、私は「ドカン」という炸裂音で寝入りばなをたたき起こされた。私の家から二〇メートルと離れていない、近所の工事中のマンションから、時限発射装置のロケット弾が三五〇メートル先の横田基地に向けて発射された。サミットへの抗議だそう。弾は基地には届かず、近くの路上で発見されたという。ロケットの性能がもう少し悪ければ、私の書齋に落下したかもしれない。このロケット攻撃の行動も、やっぱり「平和勢力」の成せる技なのだろうか。

●私たちは、「政党の政治」とも、「ロケット弾」とも違うやり方で、市民の平和プランを作りつづけなければならぬ。そのことは、相対に困難なはずだ。しかし、どうしても必要なものなら、たくさん練習をして、作り始めてみよう。そのためには、一つのテキストとしての「平和基本法」についての論議が大切だ。たくさん意見がキャッチピースに寄せられますよう。

# 最高性能弾薬 “危険度1” が 列島を走る

呉—横須賀  
リレー監視で確認

湯浅一郎

ピースリンク広島・呉・岩国



「危険度1」の標識付きのトラックが、ミサイルのようなものを積んで、横須賀に出発。



呉にある米陸軍広弾薬庫の監視を始めたのは一九八五年からである。基地のある街に住んでいても、住民はもちろん自治体が基地の実態をほとんど知らない状況に少しでも穴をあけたいという想いからだ。この間、弾薬の海上保管の証拠写真、呉市への無通告の弾薬輸送の実態などを暴露してきた。そんな中、この四、五月の監視活動から、広弾薬庫では高性能弾薬など極めて危険な弾薬の荷役お

び輸送作業が通常の作戦として行なわれ、その一部が横須賀など遠方の米軍基地へトラックで輸送されていることが明らかになった。

## 最高性能弾薬

まず四月二から四日にかけて、恩広湾に弾薬輸送船タンパベイが停泊し、広弾薬庫との間で弾薬の輸送が行なわれた。二日は埠頭で

危険度標識「1」の看板をかかげて荷役が行なわれた。三日午後には「1」表示をしたトラックが弾薬を積んで庫内に消えた。米国防省発行の「武器爆発物安全基準」に記載された消防規定によれば標識「1」は核を含む最高性能の弾薬を示している。

さらに五月四から八日にかけて輸送船クリーブランドが姿を見せ、五、六日を中心に弾薬を広へ持ち込んだ。この船は湾岸戦争の時

には佐世保に停泊し、広弾薬庫から陸路運ば

れた弾薬を積んで戦場に供給した船である。五日に陸揚げされた弾薬のなかにはミサイルのような形のものがあり、それらは危険度「1」の標識をつけたトラックで庫内へ消えた。写真をとり、トラックの長さを基準にして長さを推定した。箱状のものは長さ五二〇cm、幅八〇cm。円筒形のものには長さ三五〇cm、直径四〇cmで、これらは「シースパロー」など軍艦用ミサイルと見られる。別の場所から見た結果、それらは庫内の二つの洞穴で標識「1」の看板を立てて一時貯蔵された。庫内の埠頭以外で「1」の看板を確認したのは初である。クリーブランドからは危険度「1」「4」までの各種弾薬が陸あげされ、それぞれ異なる場所に一時貯蔵された。

## ヨコスカ到着を確認

そのうちに五月十日、横須賀へのトラック輸送の通知が呉市に入った。一時貯蔵したものを持ち出す可能性が高いと考え、詳細に監視をした。午前九時、ホロ付きトラック四台が弾薬庫に入り、洞穴の方へ行き、標識「1」を立てて積み込みをした。十一時過ぎ、相次いで出発。車体ナンバーを確認して広交差点で右折し東へ向かったことを確認した。横須

賀へ向かったことはまず間違いない。以上の情報をヨコスカ市民グループへ連絡し、できれば横須賀のどこへ入るのかチェックしてほしい、と要請した。

たまたま十一日は横須賀では空母インディペンデンスの出港日で、平和船団による抗議行動が予定されていた。そこへ余計な仕事が入り、新倉さんたちには大変な迷惑をかけてしまった。それでも清水さんが浦郷弾薬庫から出てくるトラックを八時三三分に発見。広を出たトラックと同一のナンバーを確認した弾薬の長距離輸送を、とった市民の監視で初めてとらえた瞬間であった。

その後、弾薬は五月二十六日までの間に、横須賀、横田、三沢、厚木へホロ付きのトラックで繰り返し輸送された。この間、横須賀への連携プレーはできる限り続いた。横須賀への輸送は八回、トラック二十二台分ののぼった。共同通信記者の質問に対し「在日米軍報道連絡事務所」は、その中には危険度「1」の弾薬が含まれているなど私たちの監視結果をほぼ全面的に認める回答をしている。

## 市議会に請願

ところで、一九九〇年に私たちが事前配備船による弾薬の海上保管に関して入手した

「世界規模の弾薬港湾研究」で、米軍は「民

家の密集した広では、危険度標識の高性能爆弾を扱ってはならない」という特別勧告を行っている。これは荷役に伴って爆発事故が起ったとき少しでも被害を減らそうという思想に基づいての勧告である。今回の事実は、米軍自身の勧告をも無視して、未だに危険度の高い弾薬が広で扱われていることを示した。さらにそれらが広を出て、横須賀、横田や三沢へと引きわたって長い距離をトラックで運ばれていることは驚くべきことだ。それも人知れず一般道を通りすぎている。アルトニウムや核燃料の輸送は大きな問題になっているが、弾薬、それも高性能爆弾の輸送も同じような質をもっている。

六月二日、「ピースリンク広島・呉・岩国」は市民の安全と健康に生きる権利を守るという観点から、危険の上ない弾薬の広弾薬庫での荷役を止めると共に、トラックによる弾薬の長距離輸送に反対するよう呉市議会に請願を出した。「クリーブランドの入港に伴う一連の弾薬荷役作業に関わって、一般道での輸送も含め事故による災害評価の有無を米国に確かめること」。「この問題はトラックの通過するあらゆる自治体にとって切実な課題であり、横須賀、横田などの自治体と連携を取りながら相互に協力しあって住民の生命と

(七ページ上段へ)

# 陸自 方面隊を削減・再編



## 定数13-14万人で検討

## 青木雅彦

反戦ドタバタ会議(京都)

日本は「外界」の出来事と国内の反応のタイムラグの大きい国だ。冷戦終結から四年。四十年間近く続いた保守一党支配もようやく終り、日本の政界も根本的「再編」の時代に入ったが、来年でこちらも四十才になる自衛隊も冷戦後の一大再編の時代に入ったようだ。最近の「読賣新聞」(九三年五月八日)の報道によると、防衛庁は現在五つある陸上自衛隊の方面隊を三ないし四に減らす方針を固めた。方面隊とは陸自の最も大きな区分であり、北部(北海道)、東北、東部(首都圏)、中部(中部)、近畿、四国、

## 陸上自衛隊に削減の動き

# 上からの「再編」か

# 市民参加の「軍民転換」か

中国)、西部(九州・沖縄)の各方面隊からなる。この計画では陸自発足以来の十八万人体制(定員)の縮小や駐屯地の半減なども盛り込まれており、実施されれば創設以来最大の改編になるだろう。

まず「讀賣」の同記事の要点を整理してみよう。確定事項と検討中の部分があることに注意。

※【確定】東北方面隊を廃止して東部方面隊と統合する。結果全国四方面隊体制になる。

※【検討中】さらに中部方面隊と西部方面隊を統合する。実施されれば全国三方面隊体制になる。

※【確定】陸自の定数を現在の十八万人

から十五万人体制とする。

※【検討中】世論の動向などで更に削減して十三から十四万人体制にする。

※【確定】廃止する師団もある代わりに、機動性を持った新たな師団を創設する。

師団の数(現在十三)は減らさない。

「均衡配置」から「拠点配置」への転換。

※【確定】駐屯地(現在約百六十)を統合し現在の半分から三分の一に減らす。

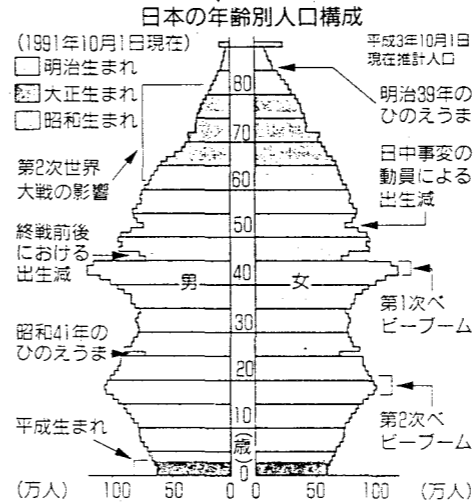
※これらは現在防衛庁内で進められている「防衛計画の大綱」(七六年一〇月閣議決定)の見直しの一環であり、九五年までには確定する。

※背景には、募集適格者の減少による人手不足と、ソ連の消滅により「北」から「西」への軍事力のシフトが必要なこと

がある。

# 基地は返さないか？

要するに、(1)方面隊の縮小再編、(2)人員の削減(3)駐屯地の削減、の三つを同時に行おうということだ。この内(1)は一般の国民には直接の関係は薄い。(2)は定員の問題だが、陸自の実員は現在一五万しか集められないし、しかも若年人口はこれから激減(人口「ピラミッド」参照)するのだから、「徴兵制」を実施(途方もないコストがかかるため現実味を欠く)でもしない限り、もともと定員数を減らす以外道はない。実施されても「軍縮効果」は感じられないだろう。国民にとって一番大



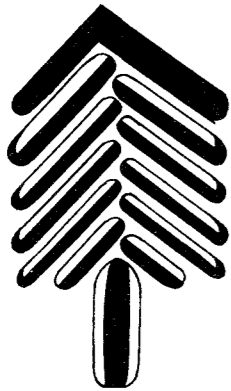
(四ページから)

暮らしを守るために尽力すること」。

十一日、総務水道委員会で、非公式ではあるが請願の趣旨説明をし、「市民の安全に関わるので、調査に入る」とともに、継続審議とすることが決まった。呉市議会としては画期的な事態だそうである。

ともあれ、問題が正式に議会で俎上にあがったことは一定の成果だろう。横須賀でも市民グループが横須賀市へ申し入れをしている。今後、横須賀、横田などと連絡をとりつつ、沿線自治体や住民にも問題の所在を知らせていきたい。

爆発力の高い高性能弾薬が自治体や住民は何も知らないなか人知れず千呷もの長距離を走っている事実は、住民の人権を無視した安保条約の差別的な現状を象徴する問題として広く訴えたい。



きな影響があるのが(3)の基地削減だ。本当に八十以上の陸自駐屯地が国民の手に戻ってくるのだろうか？

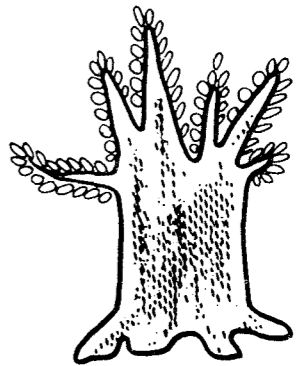
しかし事態はそう甘くないようだ。自衛隊にとってはいったん土地(駐屯地)を手放してしまうと再取得は事実上不可能。しかも駐屯地は国民への「浸透作戦」の拠点。このためありとあらゆる「理由」を持ち出して基地そのものを返還することには消極的。「讀賣」のこの記事でも「(駐屯地廃止には)地元自治体の反発も強い」ため、駐屯地廃止後も通信施設設置などで隊員を残留させる代替策も検討中」と報じられている。これは駐屯地廃止のうわさで地元が基地存続運動を行っている北海道の名寄市などの動き(「キヤッチピース」前々号参照)を指すもの。今回の「讀賣」へのリンクも、全国の自治体(基地廃止の候補地は「過疎」地が中心だろう)が基地存続請願に「一斉決起」することを期待したアドバルーンだ」と見られないこともない。

## 世論の喚起がカギ

一方で、この記事は「(この定数削減計画を)世論の動向で『さらに削減する

ことも検討する』(防衛庁筋)」とも書いているのは、いかにこのような問題で政府は世論を無視できないかを示している。しかし未だ削減要求の世論は現れていない。九十年代に入り、日本では政府が「国際貢献」を前面に押し出したため、冷戦後の自衛隊・安保をどう解決するかという問題は後景に退いてしまった感がある。終戦から朝鮮戦争にいたる短い期間日本でも「軍民転換」が推進された(そのための法律もあった!)時があったが、冷戦時代(四十年間!)はひたすら自衛隊は拡張を続け、あまりにも軍拡に慣らされた国民は「護憲派」の人ですら、基地がなくなる(なくす)とい

(十ページ下段へ)



### 資料

●なぜ、アジア太平洋への「前方軍事プレゼンス」をつづけるのか？

# 日本を母港にした空母一隻は、 アメリカ西海岸の 三隻に匹敵する

C・R・ラーソン  
アメリカ太平洋統合軍司令官

「前方プレゼンスは有効か

冷戦の恐怖が記憶から薄れ、新しい時代の脅威に備えるために我々があつらえる軍隊のサイズが小さくなるにつれて、一部では軍隊の海外配備に対するもつとらしい異議申し立てが唱えられるようになってきた。すなわち、「なぜアメリカ国民は国外に軍隊を送って、『前方プレゼンス』を維持しなければならぬのか」という疑問だ。それに対しては、アジア太平洋の状況を見れば明らかのように、

前方プレゼンスはアメリカの国益に貢献するからだ、とお答えする。一般に考えられている以上に、その効果は大きく、コストは小さい。そして、もしそれを止めたら、多くの人の想像をはるかに越えた危険がもたらされるだろう。

「なぜ、アジアなのか？」

それは、我々が将来を無視するわけにいかないからだ。この地域には世界の人口の三分の二以上が住んでいる。そこには最も大きく、

Los Angeles Times 93/5/24より

# 原子力艦 入港情報

(54)

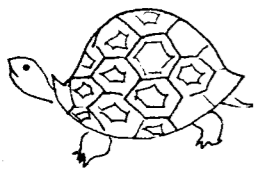
93年5月14日～6月30日

S級=原子力潜水艦ステーション級  
L級=原子力潜水艦ロサンゼルス級

◆5月23日	09:00原潜ボギー(S級)ホワイトビーチに入港。沖泊まり。
◇同日	11:00原潜ボギー(S級)ホワイトビーチを出港。
◆5月26日	11:00原潜キャバラ(S級)ホワイトビーチに入港。
◇5月28日	15:12原潜キャバラ(S級)ホワイトビーチを出港。
◆5月29日	09:00原潜ガーナード(S級)ホワイトビーチに入港。
◆同日	09:30原潜ガーナード(S級)ホワイトビーチを出港。
◆6月7日	16:00原潜ガーナード(S級)ホワイトビーチに入港。
◇同日	16:30原潜ガーナード(S級)ホワイトビーチを出港。
◆6月9日	15:53原潜ガーナード(S級)佐世保に入港。
◇6月11日	14:00原潜ガーナード(S級)佐世保を出港。
◆6月11日	14:04原潜ホークビル(S級)横須賀に入港。
◆6月21日	09:58原潜ホークビル(S級)横須賀を出港。

●1993年1月1日から6月30日の各地への原子力艦入港回数は

横須賀	7回(うち原潜7回)
佐世保	4回(うち原潜4回)
ホワイトビーチ(沖繩・勝連町)	9回(うち原潜9回)



「他のだれか」から守ること、そして、例によって「海外配備」自体の「経済効果」を韓国、日本を引き合いに力説している。日本が費用負担にノーマルといえ、この論理はひっくりかえる。  
(田巻一彦・訳)

「出費と引きかえに手に入れられるものは何か？」

定した軍隊を送らなければ、必ずや他のだれかが、我々とは違う乱暴なやり方でそこに進出してくるに違いない。  
前進配備戦力を撤去すれば、我々はプレゼンスの程度の微調整によってメッセージを伝えるという柔軟な対応ができなくなる。我々のアクセスと影響力は減少し、同盟の求心力は消失して、有事における我々の選択肢は二つに狭められる。何もしないか、あるいは本土から軍隊を派遣するか…空虚な言葉か、それとも鼻づらへのパンチか。

我々が手にいれるのは、世界を我々の価値観と利益に合致するよう形づけ、方向づけ、奨励し促進するチャンスである。我々は、我々が撤退したならば必ず止まるに違いない主導権と利己的な利益をめぐる剥きだしの争いを防止することができる。また、過去五十年間に三度この地域で経験したように、意思も準備もないままに我々を紛争に引き摺り込むような、我々の国益に対する暴力的挑戦を排除することもできる。さらに我々は、ダイナミックな太平洋共同体の正式のメンバーとしてそこに参加し、競争に加わるチャンスを手に入れる。

「なぜ、地域的パートナーシップのために軍事プレゼンスが必要なのか？」  
この地域に我々は複数の二国間軍事関係を機能させている。アジア太平洋社会における軍隊の影響力は大きく、軍事プレゼンスによって、我々は、地域の指導層と特別な結び付きを形作っている。アメリカは植民地を抱えているわけでもなく、領土的野心もないので、「正直なブローカー」として、貿易・投資環境をより安定したものにしていける能力を持っているし、信用を得ている。そのために軍事力が必要なのか？ いうまでもない。目に見える軍事プレゼンスは、どんな外交文書よりも、どんな政治使節団よりも、そしてどんな経済取り決めよりも明確な言質を相手に伝えることができる。

しかし、なぜアメリカにいながらにして同じことが出来ないのか？  
もし、アジアの人々を味方にし、彼らの思考に影響を与え、指導者の間に我々の価値観を浸透させ、この地域における国益を確かなものにしようとするならば、我々は彼らの住んでいるその場所で、仲間に加わらなければならない。そこに存在することによって、条約や我々の言葉はより確かな信頼を獲得し、危機における民衆や指導者の協力を促すことができる。また、いざ軍事行動が必要となった時、配備に要する時間を短縮され、我々の即応力は改善される。さらにこれが最も重要なことだが、我々がそこに存在することによって、侵略者による我々の利益に対する侵害を未然に抑止することが可能となる。

しかし、軍隊の規模とそのための出費があまりにも大きすぎるのではないか？

答えは三つある。

●まず第一に、我々が前方配備している軍隊はそれほど巨大ではない。我々が領土外に配備している軍隊は、世界の半分近くの地域に対して約八万人だ。それは国内に配備した軍隊の約六%にあたる。

●第二に前方プレゼンスの費用はさほどではない。人件費や装備費はどこにいてもかかる費用だ。海外配備によって新たに必要になるのは施設の建設費、運用費、維持管理費がそのほとんどだが、韓国はめざましい経済発展をとげた結果、まもなくこの費用の三〇%を負担することになるだろう。より経済力のある日本は、すでにほぼ七五%を負担することに同意しており、すでに世界最高の施設を我々のために建設している。現在、日本には空母一隻の母港を置いている。もしこれを撤去して同レベルの前方プレゼンスを維持しようとするならば、アメリカ西海岸に少なくとも三隻の空母を配備しなければならないだろう。  
●そして最後に、無料では何も手にはいらないということだ。国際的な指導力を維持し、将来を我々が望むように方向づけていくためにはそれ相当の出費は覚悟しなければならぬ。多少の出費を節約したあけく、惨めな孤立をなめるのか、あるいは繁栄の道を歩むアジアで指導的な役割を果たすのが、道は二つに一つなのだ。

したがって前方プレゼンスに関して皆が発する問は「もし、それを止めたらどうなるのか」でなければならぬ。世界の一部で拡大している混乱を見れば予想がつくように、もし我々が太平洋に、集中的で目に見える、安

●T O E Sの会議には、こちらで日程があり出かけられなくて残念です。日本のN G Oのこの種の活動はこれから大いにやらなければならぬと思っておりますので、強く支持します。アジア太平洋地域の環境を含めた安定化の方法については、六・二八―七・三の那覇で開かれる太平洋学術会議でこちらも発表をして、日本の経験をいくらかでも役立てようと考えています。また八月にはおそらくベトナムへ出かけて、衛生問題を見て来るこ

## 読者から

とになりそうです。今回そちらへは参加できませんが、その分は、こちらでやるつもりです。  
(宇井純/那覇市/大学教員)

◆早速にコピーお送り下さってありがとうございます。この運動をどう思いますか」の問いかけがきっかけになって、若い主婦や、アメリカ青年とディスカッションすることになり、原文が必要でした。どうもありがとうございました。急にバタバタと忙しくなってきました。お体大切にお過ごしくださいませ。とりあえずお礼まで。  
(M・K/世田谷)

## 編集室から

●(ま)は最近果てしなく暗い。きわめてジコカンケツしている。なぜなら余りの経済的危機のため、本業(?)のバンドマン活動に激しく支障をきたしているからだ。現場に立っていないバンドマンなど丘があがったカエルである。ナントカのないコピーである。パンツをはかずにズボンにまとうようなものである。このさいプロレスに転向しようかとバックドロップの練習に明け暮れる日々。などと意味不明なことをつぶやきながら、今月もワープロをうっているのである。(ま)

●五月は仕事(飯の種の方)の都合で(た)は編集をお休みしてしまった。もう一人のスタッフ(や)さんは、草の根援助運動で今はフィリピン。その結果、何から何まで一人でこなさなければならなかった(ま)君よ、すまなかった、もう大丈夫だと復帰を心に誓った、とある朝、猛烈な腹痛が(た)を襲った。診断はニョウカンケツセキという悲しい病気である。入院治療のかいなく、憎き石ころは「わし、ここをどかんけん。今後も覚悟するよーに」とまだ居すわっている。そんなわけで、大幅遅れ、一号つづけての減ページ、お許しを。次は夏の合併号をおとどけする予定です。カンバもよろしくお願いします。(た)

(六ページから)

うことに無関心になってしまった。

●国民をこの「眠り」から覚ますためには、抽象的な護憲や軍縮でなく、具体的な事例や思考実験で「軍民転換」の意義を市民自ら実感してもらう必要があるだろう。近刊の「株式会社自衛隊」(オウ・トゥー・ジャパン編 扶桑社)のようなシュミレーション(設定は異論が多いだろう)を、平和運動や自治体レベルでも個々独自に考え討論し、市民参加を促進すべきではないだろうか。

### 月刊キャッチピース

(月刊トマ喰い虫改題)  
No. 11 (通巻90号)  
1993年6月20日発行

発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース

発行所●〒223 横浜市港北区箕輪町

3-3-1トマ喰い虫社

☎045(563)5101

FAX045(563)9907

郵便振替●東京6-136148「キャッチピース」

編集●キャッチピース編集部

定価●100円(通信会員年間3000円)